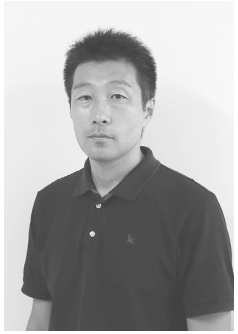
＝特別連載＝

科学技術振興機構『さくらサイエンスプログラム』友情と感激

第288回

宮崎大学の活動報告



山本　昭洋
（宮崎大学農学部
応用生物科学科准教授）

新型コロナウイルスの感染拡大の影響による海外からの渡航制限のため、さくらサイエンスプログラムでも招へいが実施できない状況が続いている。科学技術振興機構（ＪＳＴ）では、これまでの交流により醸成された海外の送出し機関と日本の受入れ機関の良好な関係を継続させるため、また新たな交流に向けた準備のために、各機関によるオンラインプログラムへの支援を続けている。今回は宮崎大学と静岡大学が実施したオンラインプログラムについて紹介する。

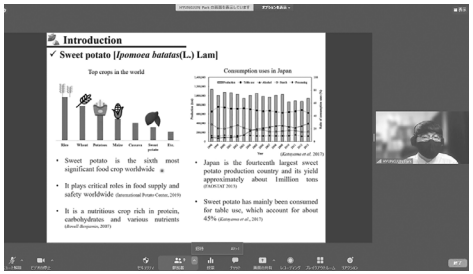
持続可能な生命・食料・環境
グローバル人材育成へ

２０２１年11月22日に、宮崎大学農学部、中華人民共和国の青島農業大学植物医学学院、江漢大学医学院との間でオンライン交流を行いました。本来は、２０２０年度採択分のプログラムとして実施予定でしたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で今年度に繰り越して実施を予定したものでした。残念ながら、収束には至らずオンラインでの実施となりました。当初は、タイのカセサート大学農学部・教養学部と大韓民国のソウル市立大学校自然科学大学を含め４カ国５大学の学生が集うプログラムとして計画していましたが、都合がつかず中国の２大学の参加となりました。なお、江漢大学以外の大学とは、大学間（青島農業大学、カセサート大学）または学部間（ソウル市立大学校自然科学大学）交流協定を締結しています（青島農業大学、ソウル市立大学校自然科学大学との交流協定では、筆者が窓口教員になっています）。

参加者数は、次のとおり。

青島農業大学　学生10名・教員４名
江漢大学　学生12名・教員３名
宮崎大学　学生７名・教員２名

集合写真



植物遺伝育種学分野の発表

プログラムの成果

参加大学が減ったことから、オンラインプログラムは、当初からメインに据えていた学生の英語での研究発表を行うこととしました。各大学から２～３演題、計８演題の発表があり、１演題あたりの発表時間は質疑応答を含めて15分としました。また、座長は学生に務めてもらいました。農学分野だけでも、植物遺伝育種学、植物保護学、植物医科学、植物栄養学に関連する発表があり、さらにCOVID-19感染症を引き起こすSARS-CoV-2の研究などの医学分野の発表も行われ、発表内容は多岐にわたるものでした。対面でも英語でのディスカッションはハードルが高いものですが、オンラインだとそのハードルはさらに高いようで、活発な議論とまではなりませんでしたが（教員は口を挟まず見守る、というルールでした）、学生たちにはよい経験となったと思います。

今後の展望

参加した大学だけでなく、参加できなかった大学も含め、対面での実施を切に望んでいますので、来年度以降、再びさくらサイエンスプログラムにお世話になりたいと思います。新型コロナウイルス感染症の１日も早い収束を願ってやみません。